環海異聞

二

洋学文庫
文庫8
A 202
2

大槻文庫

環海異聞巻之二

ナーツカ滞留紀事之二

一船主の名「ヱストラスイツイイチカラロフ」とゆい「カラロフ」苗字なり彼国の人惣して苗字を後なきゆい常に呼いと苗字を称ゆい船と即此人の船なり始落付い場所へ遣しい人と此「カラロフ」より遣しゆい

一此嶌本国の手に入りい後此島〳〵より取い海獺

の皮類とりたての為ふ舩を遣し役人も詰合い
るゝと見へゝい

一島人の首長ゝも可ゝ者と相見へい其ゝ住居の
土室へ入りて見いに常の者居い処よりハ至て廣く
板敷ふて天井杯もたゝりて御坐い扨本国の帝王
より賜りゝて絲羅紗の美服ゝ金銀の玉乃
下りたる物を秘藏しゝい是を着服いたせゝも
見ゝい　給分の如ハ平人ふハ煙草百目與玉ハ此
首長ふハ二百目些ゝゝゝふ程のゝ事なり此おさ

だゝふて此嶌人の示しゝ届かぬ故オロシイヤ本
国より年貢取納ゝゝゝ頭役とある人を交
代いゝさせて差置趣なり
一夜中燈油ヨリジキ此見ヨルバ海豹アサラシ羽ウロウ猟虎ラッコ等
の油を用ひ燈心の用ゝハ麻繻半杯の古手を引裂
用ひゝい

一夜ハ四ツ時頃ゝ存い節臥せり朝ハ早ゝ起き
猟ゝ出ゝい
此嶌寒風別して烈き節ハ途中ゝて吹倒さるゝ

度〳〵御坐い拙者ゝも居い処より食ひ通ひ
い場処まて往の間に御坐いへゝも風烈き節ハ
往来難儀おりとて年寄い者共ハまい〳〵ぬるを
時〳〵御坐い

一食物ハ鱈鮭鱒等の魚類えうり日〳〵給へゃい

一一七日ゝ一度つゝあざ〳〵「コーシキ」の油ゝ大麦の
粉を煉り煎りたをあけゝて塩をいき水を
加へ煮てゆるく〳〵たる物を振舞ゃい
嶌人へハ皮を餘慶取集ゑ春りい節えうり

一嶌ゝ生い草の如き草を焼きて灰にし煙草て
摺ま努置嶋人猟より帰りたる時其手掌へ一
撮ふゝ些ふまこハ是を得て甚喜ふとやふて
直ゝ是を鼻へこみ又鼻の間へ入ゃい煙草の
氣有るうちハ含み居る也

一此嶌水ハ清冷なり

一婦人産前後の病あるをきかゞ産後初生の
児を滝の落る所へ連き行き洗ふ又時〳〵

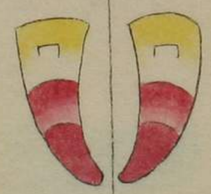
抱子を其所ゟ抱き行て水をあひせる也
一乳汁ハ出るもの多かゝ次ゝ見へ赤子ゟ
あさゝしの皮なをとをやゝ〻せ居るを見
やれ

嶌人男女并
少女之圖
此島人の惣名をアイノヲイトロ
とゝ〻ふ

額上頭圍ヨリ先ヲ
冠リタル図
木ヲ彫リテ造リ
漆塗ヨ出ラシメ
用ヒ鉢巻ヨ似
タリ

嶋の婦人鼻柱ヘ穴ヲ穿チ小木ヲ横ヨ
リ連環ヲ無レトケナク全図并
耳輪数孔ヲ穿チ同様ヨ有リ全図

衣服の縫目両側ヨ
オクチョの背ヲ縫附
ナリ図



紡錘(ツム)之図

セイウチの牙ヲ造リ
後平持参ル真鳥

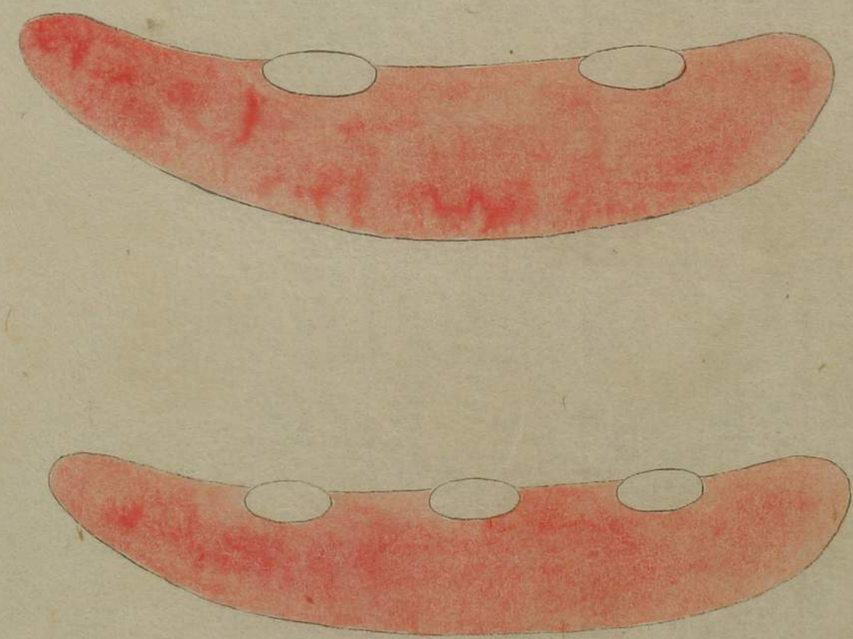
セイウチの圖

島人頭まで被る皮衣を着
皮船に乗り綜を使ひ漁猟
をなす圖

船の両側に數本の
とりを結ひ付けり

皮船全圖

二人乗
三人乗
の船なり



綜全圖

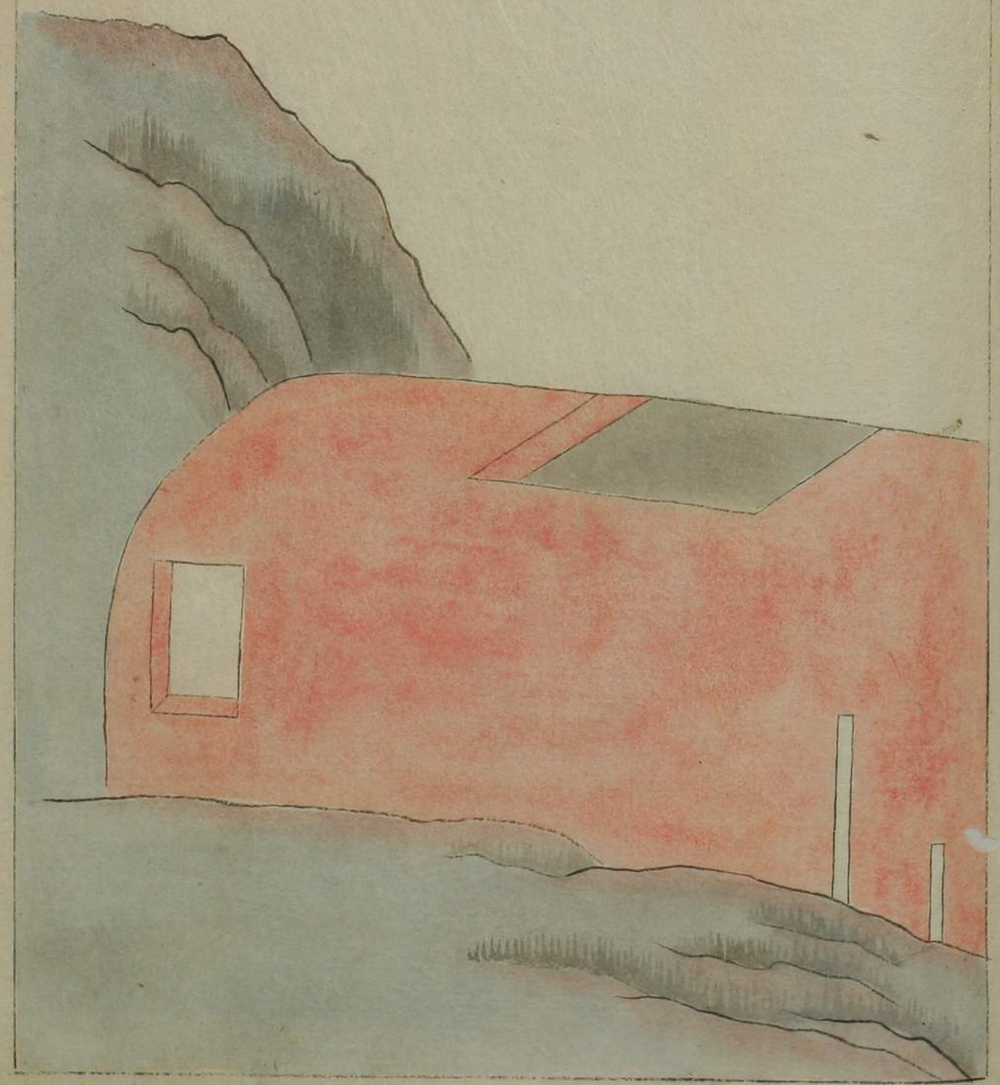
綜を遣ふ手法の図

綜の本を受る小板有一孔を穿ち此穴へ右手の示指をさし込て其小板を此指にて固く握り左手へ鋒先をとちゝ柳ゝなり

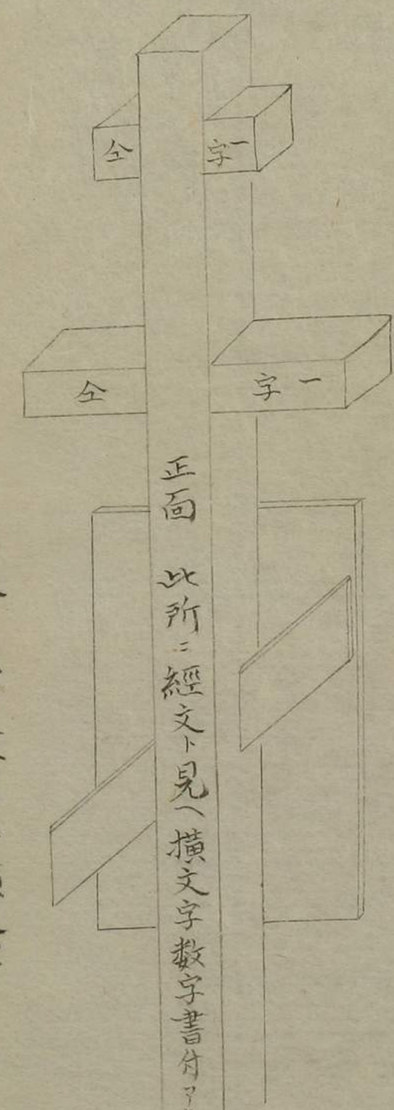
頭上へ被る皮衣全圖

ナアッカ魯西亜人居所圖

造り心同しく土室なれ共
入口ハ横手ニ有て板戸を立
樽風くもいふへき所ハ硝子
障子を仕えて天井の真中
ニハ白セイウ氏の皮をもて葺く
是ニて常ニあるうをとり且
雨雪を避く一土中に四十人
程住居る故内ハ長屋造りの
如くにして通用ハ其真中を
あり面くの部所ハ夫くに
仕切りなく



如此角柱ヨテ造りいらの嶌の中ヨ建て渉度横文
字に彫付ハ坐い何まこゝヤうの相認何の為ヨ建立いか
承り不申い宗解ヨかゝりいらめまや追ゝ地方ヨ入いへハ寄ゝ
所ゝヨ此柱たゝ渉度い



此板ノ裏ニ數百字横文字
彫付アリ經文ノ由ナリ

領知ニ致シ本国人數住居い所ハ何まこの地ヨても建有之趣相聞申い

一小便ヲ溜置洗濯水ヨ用ヲ皮衣の汚またるもの
其溜小便ヨテ二三日漫け置きて洗ふ其皮衣
至テ清ゝ垢落てきまいヨなる也頭髪ヲも洗ふ也
一此地惣人數百人程ヲ住居い趣ヨ其中ヨ魯西亜
人ハ四十人程ヲ居申い刑ロシイアヒ人居宅ハ図の
上ヨ書記せ一通り也
一本国船より惣ゝ麻ヨテ作りたるもの或ハ食物類
鍋釜針木綿糸類烟草等載せ来り有之い
一此所一ツ星北極星ヘ頂上より申し北の方へ向ひ見申い

一此嶋の言語日ヲカタ月トケタ水タカ
此三言覚い迄ゟ御坐い「アミシヤーツカ」も詞ハ
仝様ゟ兼りやい
一翌乙卯の春の末ゟいたり船主「イワイイチカラロフ」ヤ聞いハ
平日魚類ゟ給い所ゟ居いてハ各身分ゟ宜
かるまじ〳〵間二年ゟ経ふて本国ゟ交代致い処
へ連渡り可ヤ由ゟて出立用意ゟ仕拙者共十九人
へ草の着服共ヘヤい即貰ひ受着用仕候ゟ
右船ゟ兼組四月三日ゟ覚此島出帆仕い
一此嶋へ漂着せし〳〵寅の六月ゟて當卯の四月まて
十一ヶ月ゟ相成ヤい
一取納い皮類一艘ゟ積受い程相集い処ゟて歸帆
いたし〳〵い由此度の歸帆一年早く御坐い由是ハ
漂流人連渡りいためゟ〳〵みいて出立ゟ兼りやい
一日本の寛政三年辛亥年ゟ此船在留の
由此ゟ〳〵まて四年ゟ奉存い
一ガラロフ歳六十に近く相見へヤい産ゟ「ケライカ」
ゟ〳〵所の由妻ゟ連渡り居い在留中子一人
出生の由妻の年十七歳ゟ兼りい

右「イワノイチガテロフ」事　拙者共を地方へ連
渡い始末よろしく御坐いて右勤功な
り高頭（アキヒトカシラ）の面々あるものにヤ分らまし〻
あらうこれハ高人中間より別合出さる
の様子兼りヤい
拙者共此度「ペトルフルカ」の都出立帰帆の節も
（カラフロフ）使節の船まで参り呉いて世話呉い
同月廿七日頃「サポショウ」と〻ヤ嶋へ昼四ツ時頃着
此所より魯西亜人四十人余罷在い由此嶋より
取り溜置いらつこあさ〻らしの皮等を積受い為
船をよせい様子に御坐い拙者共ハ上陸不仕船
より罷在ヤい
一此嶋「十アッカ」より北の方あ〻「ポロシイ」里数
四百里程ありといへう
一此船路海上「コーシキ」別して多くヤい
一四月三日〻覚へ「十ーツカ」出帆後十日ヤ走り
い処海水の氷り堆（ウスタカ）く有い所へ乗かけヤい
拙者共ハ海面より山のごき処数〻見へ間嶋

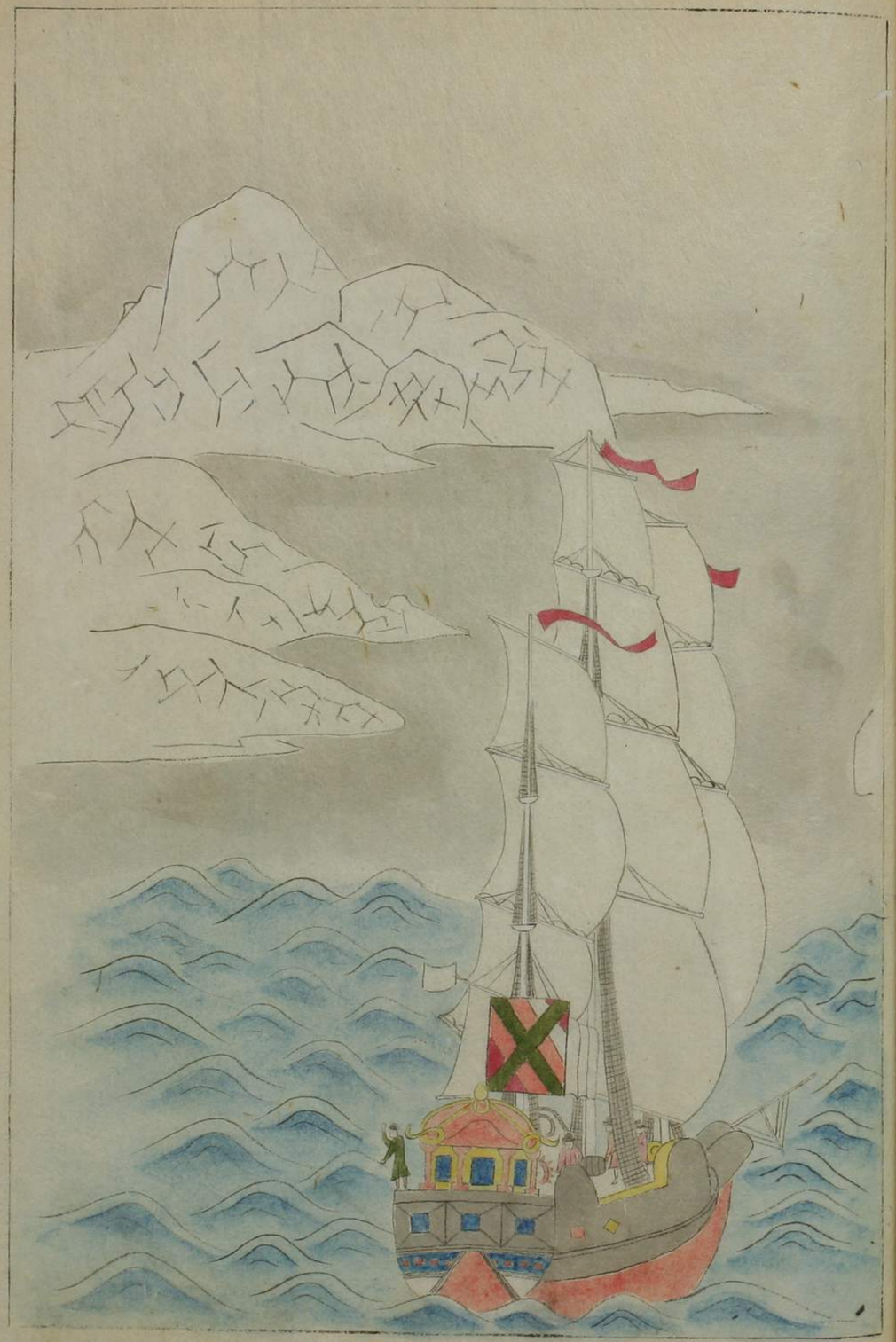
山あるへしと存し処是ハ海水氷りたるよりて又其
上へ氷雪段々相重り小山のごとく相成いとの
由船頭是を見殊の外驚転(キョウテン)しやい此海ハ北亜
墨利加の方角なり「サンパショウ」を三百里北の方
ゟ乗落せりとこの〳〵ゟも如此の氷海ゟ至り氷山も
あるはまい処迄入ゟ〳〵しハ怪変ありて舵を
廻し〳〵あるていそきて此所より二百里乗戻
して「サンパショウ」へ着船ゟ出帆より日数二十三四
日経るあり

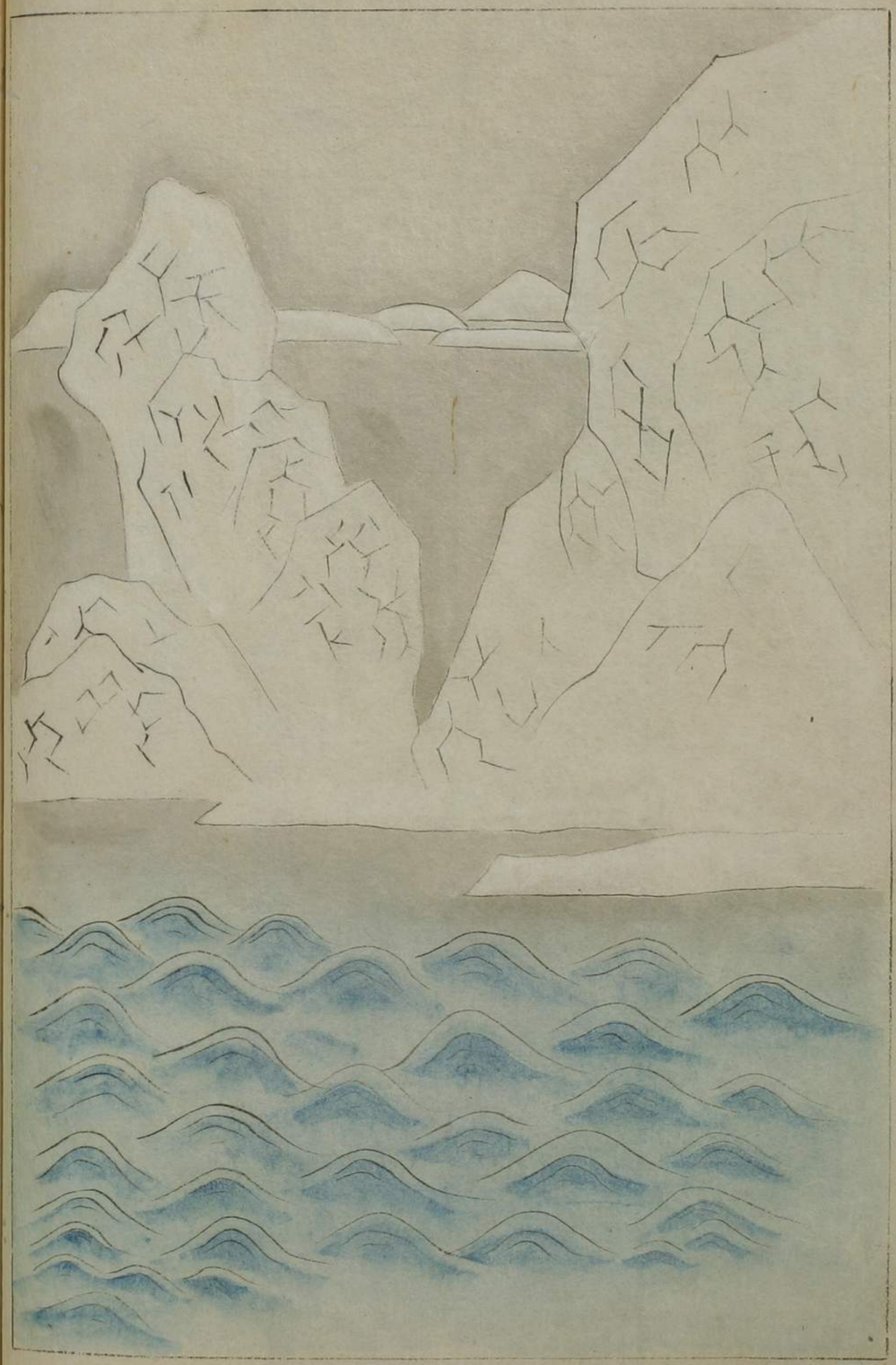
一此所魯西亜領本国より地続きゟて南の端の
〳〵本領の地方へ入口の湊なり
一「カミセイツカ」より此湊への里数兼り不申い但四十
餘日経いて着仕い
一「ナアツカ」より「カホーツカ」へ直渡り海上彼里法二十五
百里と兼りやい「サンパショウ」「カミセイツカ」両所へ立
寄り此湊へ泰着のゟ故凡四千里も有へき
かと存い

按ゟ南北極出地六十度前后の地より海水

氷り七十度餘南北極下よりあるときハ常
よ氷りて解けさる事地図よりこれを氷海の部
とし極寒の候よりこれハ其氷の上よ雪積
又氷ハ亦たちもつついて重なりて山を
なすさいき氷山あり卧兒蘭土（グルーンランド）亞西（アイスランド）
坡国（ハリ）等の地ハ氷海よりして漸く極下よ近く
氷山現ずる暖和の候を得ときハ傳動出沒あるところ　和蘭等の人
其海よ鯨漁よ船を行り其形勢（アリサマ）を図状
せるものあり此度漂人等とのかゝまるの状

これを思ひやるときハ危ふしして両極下七十度の海まで船を乗り込んこと
船頭大きよ驚く事本朱り記せり　又南亜墨利加洲雪山と譯せる所の岬の海上を廻りしこと
依て今新しく和蘭寫真せる図より想
像して其景を製ずしるよ附せり我漂客
等不思議よしてかゝる所まで到りしハ古今の
奇事驚異とすべき事なり





屋和都蛤（オホーツカ）

寛政七年乙卯六月廿八日「オホーツカ」ヶ湊へ着
岸ス本船の船頭より拙者共のみを早速役所
へ相届引渡しゃい同所より指図の様子より町役人
体の宅ゝ相見へ表間口六間餘裏行八九間程有
之内ハ板敷ゑて腰掛數々居へ置い所へ同道ナ
ス人共ゑ一所ゑ着置ゃい食事ハ麦の粉を餅の
ゝゝ拵ゆるものを共へ給させゃい（麦粉の麦下ゑ詳ら）

一此所ハ魯西亜領

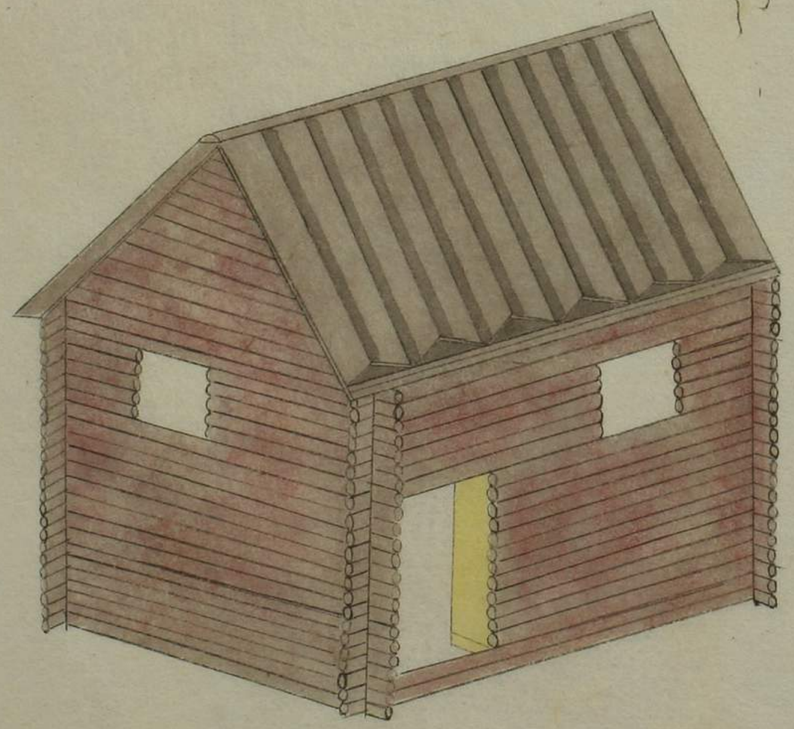
本国都府までも地續きゑ御坐い南向きゑて
大河の海へ注り湊あり此地より北の方ゑ大河
流るゝ由近来相構い新港のよう美りやい
一彼所御坐いて都ようも奉行（下ゑ略）相詰居い
一ナーツカより此湊まて大凡彼里数ゑて三千八百
七十里程船をよせい「アミセーツカ」より八未申（南の間）又
申酉と立りやい「カミシヤーツカ」と申湊の岬をハ
右ゑ見て此所へ着岸仕い
一着岸の節ハ五百石積位の船五六艘繋り居やい

一此港ハ北海中の所領ゑ仕い嶋〳〵又北亜墨利
加の諸国へも此所より船を仕出い由
一日本蝦夷諸嶋の内「ヒイツケ」と申嶋へ近年
麦の種子牛尔の類を此湊より渡い由美やい
此「ヒイツケ」ハ「カミシヤーツカ」と申湊よりつゝき い嶋
とその第十八日ゑ行〳〵ると此嶋の猟虎至〳〵
上品ゑ〳〵他産の猟虎ハ価一倍仕い様ゑ美
りやい（蝦夷辺奥蝦夷「ウルツプ」嶋の内ゑ美し「ウルツプ」松前ゑて猟虎嶋と云ふ）
又桜ゑ伊勢光大夫等を先年護送して

来りし船も此湊より仕出し「子モロ」へ着し
追〳〵松前へ来りしと聞り家初光太
夫ハ漂着の嶋を出て「カミシヤーツカ」といふ湊へ
送らき地方へ送らきし由

一石火矢数挺居へ置ハい湊の左右よりの
一方ハ七ハ挺一方ハ砂場の上ハ三四挺又寺の前
ハ二十挺餘居へ置い何きも車仕掛の臺ハ
のせ御坐い長サ七尺半り口径り弐尺四
寸御坐い

一寺ハ一ヶ所ホさい侍の寺
一家造りハ



荷を積たる雪車を
犬ゝ曳かせる圖

刀ミシヤーツ也ゝと
同樣これを用ゆ

此所是まで居やい嶋よりハ暖うゐる方ゑ御出い此
節ハ日本の二月頃の氣候と覚やい昼の内ハ綿
入袷ゑ草ゑの着やい八月ゑ入いへハ雪降りや
十二月の頃ハ海の水も厚く氷り川々ハ勿論
一面ゑ氷りやい右の頃ハ「カミシヤーツカ」とや濱へ
千里餘の海まても厚氷ゑり詰い故雪車ふ
枯木を積犬ゑ云かせ往来仕い
一此所馬無御坐犬を專らにひやい

一此地ハ雪多く積りい土地故專ら雪車を用ひ
薪水の類何ゑても積み冬ゑ至りいへハ海陸共
ゑ數疋の犬ゑ云かせやい其犬のつかひ方能く
ゐくしたるものゑ使人錫杖のごときものを以て
これをふり笛を吹きて「ヒロ」右ゑ云ゑ といへハ右の方へ
行き「ライワ」左ゑ云ゑ といへハ左へ行き「ヒラ」真中ゑ云事 といへハ
いへハ真直ゑゆくなり只行きといふものを「シトバ」
といふ錫杖を地ゑたてゐくせハ足をそろむ
尤荷のかろき重きゑ從ひて犬ゑ多少有て

云うもあり　この物児の時より戸外へ出さ
畜ひたてるふ内より此こに置くあるもの
夏ハ生魚冬ハ干魚を食しむ　これハ此地冬を越せし者共見聞せし事
左手物語まる所あり　カミシャーツカ也も同様あるべしとい
桜より北里（シベリ）の北盡境沿海の地も如此犬を使
ふの図説和蘭録せる輿地の書より図説あり

一土地ハ馬なき故ヤカーツカとヤ所より呼ひよせ
使ひやれこれヤコーツカの方へ人の往来物を駄
送のゝ人あり彼地よりこるゝへ人をのせ
きたるまゝそのを駄送し来るし馬を
留ゑをき其返り馬よく此方より用を便し
一ヤコーツカ前後の人々の惣名を「ヤコーデ」とヤい
即ち此所よりも「ヤコーデ」も離り居ヤい
一滞留中食料ハ右よヤい麦餅（ヤルピ）と云ふ詳ふ　オルコーツカの所在　英ふ
牛肉又魚肉を煮たるものも給させヤい

一此所より日本米一俵見掛やい日本より〻〻〻〻
〻〻やい俵も其まゝの日本俵より御坐い

一八月十九日拙者〻も居い処へ役人参り此地出立い様
仕方致やい惣人数一同より不相成い趣にて拾五人
鬮取ないたし儀平善六辰蔵三人相中り十八日発足
仕い代官交代の序〻相見へ代官共軽き役人
附添人数二十人斗ふ御坐い三人の者共を馬にのせ
先河コーヅカ〻やい所へ登り趣に御坐い

一外拾二人の者ハ跡より残りやい惣人数ハ追々に送
のゝせる様に御坐い此度ハ代官先に参やい

一是より先の道中馬上にてゐくれてハ通用不相成
歩行にて〻やい事ハ出来不申馬ハ河コーヅカ使ひ
やい河やコーヅカも馬ふのり口附ゐ〻往来仕い
真先一人乗り段々馬の口に付ゐき跡ゑ
従ひ参りやい何足も右のゝ〻ふ御坐い又〻旅
別〻ての支ふ御坐い

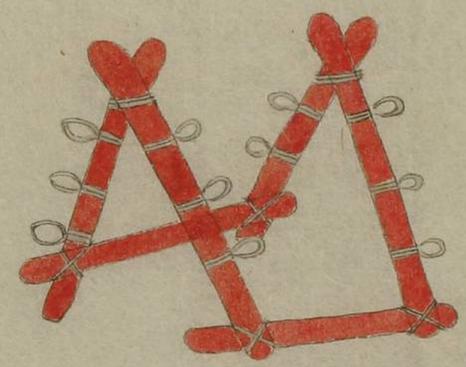
一馬ハ道中夏ハ青草を路よたべやい久〳〵
ハ已ゝ年ゟ雪をゝり枯葉なとを見つきるゝ
給ゆハ外ゟ飼料ゟてハ持参不仕
一彼国の馬ハ二歳の時畢九ゝこゝ去りゆハ使ひ
馬の分ハ箇様ふいゝしへハ格別丈夫ゟて遠路
よくいたゝ草肝不ゆハ由但ゝ父馬ゟ致ハ手りハ
きんきりゟ無御坐ハ尤別の処ゟ畜ひゆハ
一道中荷物并小食物等馬ゟはきゆハ此所
より七百里彼里数先アウタニと申処まて人家宿次
もなく山道ゟゝうみて夜中ハ野宿仕ハ
一此節ハ馬五十程馬方の「ヤコーテ」ハ三四人ゟて御坐ハ
一道中装束ハ皮類着物也毛の方を内ゟ前後
縫ゟ名頭を出ゝハ穴をあけ裾の方ゟ着て
上の穴ゟ頭を出ゝハ襟の処ゟ頭巾を縫
つけ置用ゟゝ出ゟ様ニゟゝ頭巾ゟ右穴ゟ頭を出ゝ襟の方
ゟ直ゟ右頭巾を引かゝ両手を左右の筒
袖へ通ゝハ尤手袋をゟゝ足ゟ包み鹿の

皮の皆をたきやれ代官其外何とも同様な
御坐い（図次ニ見ル）

一馬の脊ニ片け人をのせ鞍の如き物を「セッロー」
とやれ又荷を片ける様ニ仕掛しなるものを
「セリワチカ」とゝ（次の図の如し）

旅行用意せし人の圖

「セリウチカ」図



荷を固く結ひ元を輪かゝしなる図

これを荷鞍の紐に抱せるものにて引をゝ持たるもの

細くたち来るあり紐に捻て

草あり

馬に荷を駄しなる図

一此道中一躰高山多く所〳〵山坂かちに御坐い引つゝき雪をぬむ如よう馬の下腹まて雪届き い如多く御坐い定り い道筋ゝてい有〳〵相見へ

真先に「ヤコーデ」馬に乗り相三道案内仕い荷付馬人の乗い馬千明馬何も口附すゝふて馬の

乗り次第ふ仕い皆先の馬の跡を志たひ乗り

又所〳〵畢湿の所甚〳〵多〳〵御坐い故迚も

馬足ゝ為くいてハ往来なりかゝ御坐い

一鳥獣さゝて見掛不申い熊をハ度〳〵見当り

やゝ折〳〵馬をとゝゝい故油断なくゝゝゝゝゝい

一道中山路ハ兼の松多く御坐い此外木立の所

も御坐い所皆小柴ゝゝゝゝゝて御坐い先き〳〵

ハ花の咲やさゝ櫻木多く御坐い得共

此道中ハ至〳〵不足ゝて御坐い

九月廿六日「アウタン」ゝゝゝゝゝ所へ着これまて七百里

程御坐い由三十七日かゝゝゝゝゝゝ覚ゝゝゝ（「ヤコーツカ」より三百里手まへ）

（ゝゝゝゝ共ゝ彼国の里数）大川の側ゝゝゝ家数三軒ありこの所

ゝゝ「ヤコーツカ」まての食物心掛ゝゝゝ

一「ホーツカ」出立の節馬数九十足斗りゝて森い処

右の雪中故道〳〵ゝて追々艶（きれ）いて漸十八足

程残り旅行成兼い故途中三百五十里ほゝゝ

手まへゝゝゝ此「アウタン」まて未格別弱ゝ不ゝ馬三

足ゝて「ヤコーデ」三人をつかはし迎馬二十足ゝゝゝ

呼寄せ人も十人斗り食物等ゝゝゝゝゝゝ出立い

故此処まて森ゝい由ゝい馬ハ此等の川向有之

ゝゝゝゝゝ寄せる趣ゝ御坐い

一大抵九月廿日頃「ヤコーツカ」へ着可仕心得ゝて其

用意鳥獣の類塩漬よいたし外よ麦の餅を袋
よ入て馬よ附添うやい皆代官所より用意
いたしくれい然ル所存の外道中手間とうい
事に付給尽くし漸く麦の粉三袋残りいを
拙者共三人へ日よ椀よ一盃つゝ渡されい間
湯よかきたて給へやい尤此間よ水にて御坐
おくれに付雪を鍋よくこかし湯よとうし用
やい野宿故鍋等も用意道中仕るよ
御坐い此島廿六日の頃ハ雪無く七月末よりハ
ちとや降やい

一此節オロシヤ人の内足凍へ拙き腐い様ヨ相成
者両人御坐い此島迄ケ様の症毎度御坐いよ
ヤコーツカ」着の上療治仕い

一此島別て寒氣厳しく覺やい

一麦も出来不申牛野尓（コヒツジ）の類さう者て
給へやい右牛の乳汁を飲やい
乳汁をとゝろ法牛肉を食料とする馬
「イルコーツカ」この処よ詳まて
食物等心うけ出来駄賃送いたさせ此所出立仕て

「ヤコーツカ」を指奈りゃいこれよりハ高山となる
道中筋間〳〵人家あり五里六里十里位ハ所ゝ
より人家あき場と御坐い道筋の川〳〵水り一
面に厚〳〵と居い故水の上を通りゃい

一此道中民家の屋造りハ土室の如く仕くり
屋根并四方〳〵もふ土にて厚くぬり一方の横
手ゟ入口をつきゃい入りハ内外二所仕い外ふ
ゟ仕けて戸口より入り又横へ曲尺の手ゟ内の
戸口御坐い其内の戸を開きて居間へハ通り

ゆゑに仕り御坐い外の戸口たりゑてハ
表の方より寒気煙の〳〵舞ひ入り誠ゟ
堪かね〳〵右の〳〵ゟ仕い戸口二ヶ所故寒氣
の内へ透い事薄く御坐いゑゃい内へ入いへハ
板敷ゟて御坐い又土間も有之い其所ゟハ
草を敷置ゃい穴蔵所ハ卧床を高く致〳〵
置ゃい

一家のあゝい窓より取りゃい其あゝ障子の
ところ氷りを用ひい如御坐いこれハ厚氷

を引きり窓形よ切り抜き拵て右窓のハ
へ仕え名廻りの透間の所へハ雪をたゝ其上へ
水をかけい左様いゝ〳〵へハ忽ち氷り付ヤハ
内ハ殊の外あゝ〳〵御坐ハとし外より
雪ふきかけ又ごみも掛りハ節ハこれを拂ひ
ふきんへハ初名よりもまのたり〳〵あゝ〳〵桐
ありゃん

「アウタン」より以西
人家土室之図
窓ハ氷の板を
仕入をなり

一此辺の婦女夫なるハ髪を三ツ組まゝ後へ
下ケうしろより二ツまきて額へ結ひ置ヤい
娘子ハ三ツ組まゝて下るまてゝ惣して
女子の冠りものハ羅紗天鵞絨其外毛織物
類まてゝ頭巾の形のゝ有いろ〳〵
栄耀いゝて着ヤい縁りまハ猟虎「ソーホリ」
鼠の皮を用ひ毛の方を外まいゝヤい
一梯ハ両遠引梯まて牛角又「セイウチ」鯨の
牙ふても作りヤい平日ハさゝヤさぬ様まゝ御

坐い此辺の女入墨ハ不仕い

環海異聞巻之二終

環海異聞巻之三

亜哥都蛤（ヤコーツカ）

十月三日「ヤコーツカ」と申所へ着仕い
「オホーツカ」より八此所迄最初三十日の見詰ゑて
着積り出立仕い所異厳寒の節故道おくれる
相成五十日餘ゑて着仕い此所家数凡二千軒
程も相見へ木造り石造御坐い拙者共ハ
九木ゑて組立ヶ造立ヶ家へ指置宿主

ようむきくとち牛肉等を呉へらき給へ
やん

一人家ハ木造りも石造りも御坐ハ共役処と
寺さのうなり家作りの仕方「イルコー
ツカ」の所可乗
一寺ハ九ヶ所御坐ハ寺作り仏躰共ニ寺僧の様子
「イルコーツカ」の所ニ詳あり
一此所ニ四十餘日罷在ハ
一前ニヤハ寒気ニ傷らき足脚へ腐り込
いとの當所着之上醫者を頼ハ処外料

奉り朽果の処を鋸ニて挽き切り其跡へ
ろれくの手當いろくと巻あて療治致ハを
見やハ追くく見ハへを此国ニてハケ様の
病毎度御坐ハ事と相見へ木を以足の
形を造りたきく足を致し杖ニて歩行致
いとの「イルコーツカ」ニてハ毎々見當りやん

十一月二十四日「ヤコーツカ」出立「イルコーツカ」へ趣き
やん是よりハ大抵南へ向ひて旅行仕ハ代官ニ

「ヤコーツカ」ゟ こゝまゝ拙者共の宰領付添登
仕れ
一道中馬継ハ彼里数ゟて 十里十二里十八里
二十里二十五里位ゟて御坐れ
一宿〳〵駅場の名一々覚不申但「オリヨノ」
とゝ所 家数三百軒程ゟて 代官も在番
寺も相見へ申れ 家作「ヤコーツカ」同様ニ
覚申れ又「ケヤーゲカ」といふ地覚申れ是ハ

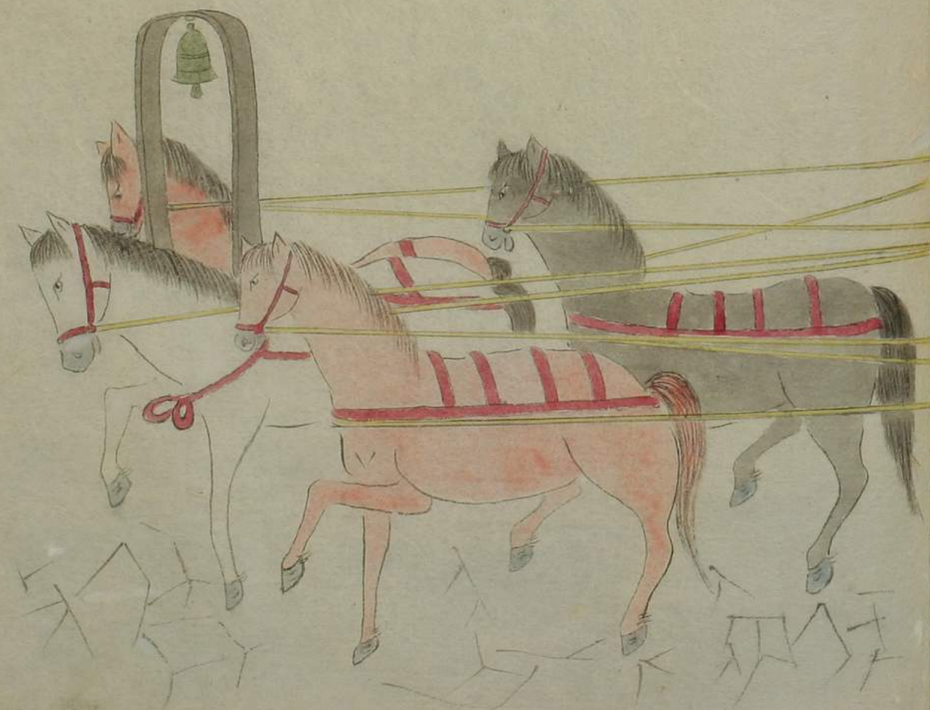
「オリヨノ」ようハ家数少く寺も二ケ寺なる
ゆゝゟ見受申れ 此所ハ「イルコーツカ」ゟゝ
九百里ゟまゝとゝ申れ
一道中ハ發足ゟゝ雪車ゟのり馬ゟ乗せ
申れ馬ハ継場の遠近ゟゝ四足あるハ
六足附申れ
一此道中「イルコーツカ」まて大河引つゝき川
筋多〳〵御坐れ 此節氷厚くゝゝ詰れ

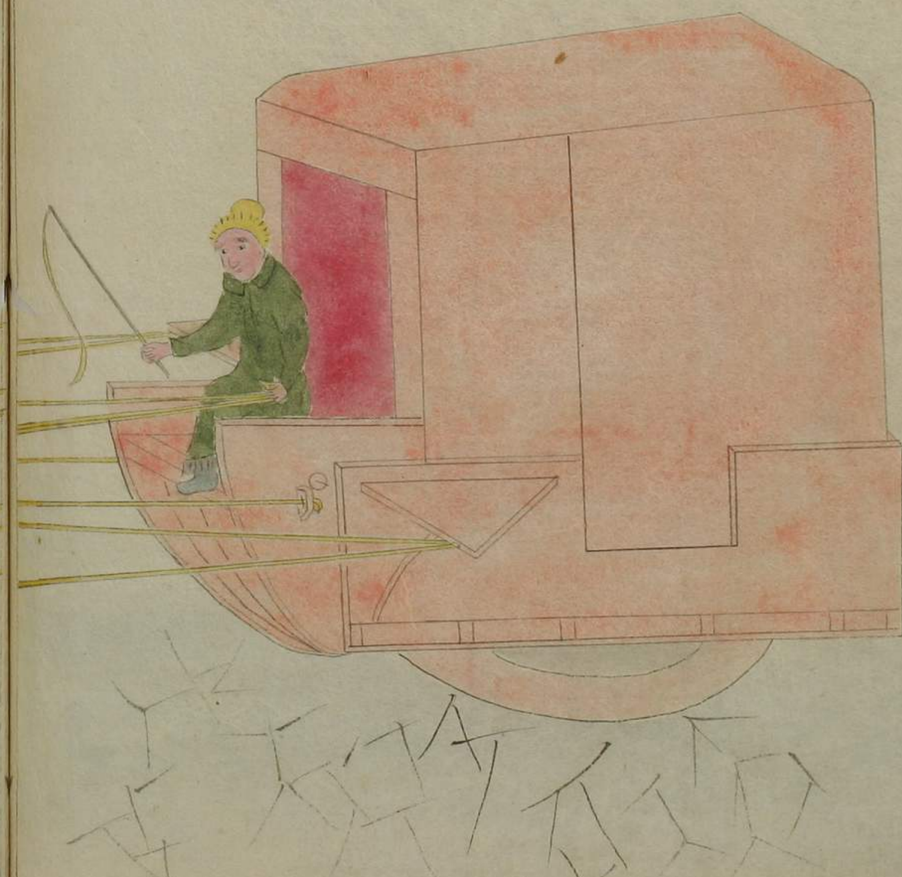
故右の雪車を馬ゟ元せ氷の上を通
行仕い尤さてへらゝやさ無様ゟ馬へハかんぢき
先の方三角ゟ〜て六七分の長さゝりを四足ゟ先へ走ら勢ゝい
至く早く陸よりハ氷面平ら故殊の外
道ちゝとゝゝやい但し絶場の駅ふ至りい
へハ其所ちゝゝ上陸仕い又川の内所ふ
より氷ゟ〜て岳のゝく〜ゝゝゝて通用
なゝかゝき所御坐い其場所ハ陸を引

元のせゝい一躰陸地も「オホーツカ」より
「ヤコーツカ」までの道中より格別宜く御坐い
馬ハ先き馬ゟ鈴をけを置い故其音
ゟて先の驛ゟて絶馬を引掛け待受遅
滞なき様ゟ仕い

人の乗なる雪車を
四足の馬にて河氷
の上を牽きたる図

雪車の前より腰を
掛たる人、馬奴なり
革紐を附たる鞭の
如き物を以て馬足
を進む





一道中左右ハ山ハ有之い得ハ高山ニテハ
相見へ不申路ハ雪降り積い故土ハ見へ
申さぬい「オホーツカ」出立の後八十日ほと
土を見いまて ふ御坐い
一右申い通の松ハ木ハ多く沛坐い櫻の木ハ
折ハ見當り申い外の樹木ハ見ぬ
不申い
初めハ記せるハ拾五人の者「オホーツカ」
を三度ふ往返ス右者儀平等第壹番
ニテハ文ハ旅の道中記るす左平ハ第二番ニ
津太夫ハ第三番ニ両人同道ふ有るハ
ハ夏の道中故別段其様ハ兼之趣
左之通ふ御坐い

寛政七年乙卯八月十九日
「オホーツカ」出立翌八年丙辰
正月十四日「イルコーツカ」へ着

儀平
善六
辰蔵

寛政八丙辰年十月上旬
オホーツカ出立同年十一月
イルコーツカへ着

同年七月三日オホーツカ出立同年十二月下旬イルコーツカへ着

九大夫
銀三郎
茂治郎
九兵衛
太十郎

津大夫
清蔵
己之助
吉郎治
市五郎
八三郎
民之助

一津大夫ヤハリオホーツカ出立之節ハオロシヤ人宰領一人ヨ拙者ヨリ七人其外ヨリ馬士（ニヤカタ）オヤコーデ馬十六七疋ヨリて奉ヤハリ辰の七月三日オホーツカ出立同月二十九日ヨリヤコーツカへ着仕ハ

一道中ハ昼の内ヨうて馬ハ夜分ヨハやすませハ得共所ヨより夜道も仕ハ

一馬の飼料外ヨ手当不仕道〳〵青草を

苅喰せヤハ輿ハ日本の通り人の乗り鞍弁
荷をはきる馬の仕掛ハ格別の致方ニ御坐ハ
別ヨ図有 荷ヨ附るものハ諸道具食物類よりいつ
きも牛の皮袋ヨ金ヤハ荷物ハ一駄十二
貫目程ヒ有之ハ荷付馬の上ヨ人をたのせ
不ヤ別〳〵ヨて御坐ハ
一ヤコーツカ道の道中山〳〵多く箕根山ヨ
とより高き所ヨ御坐ハ道節嶮ヨ
定り通り無之幾筋ヨもつき居ヤハ岩き
ヨ立ハ者覓ハてとり糸りヤハ此節夏季ヲ
て御坐ハ所山谷の間ヨハ平日ヒそうも
水を渡りハるヨも御坐ハこと凡ハヤコーツカ道
道中半分程の所ヒ覓ヤハ其前後ヨハ水
ヒ見當り不ヤハ小松立の所御坐ハてお〳〵
かけ通りハ所も御坐ハ
一松ハ日本の松のごとき小松ヨて御坐ハ五葉

松冨士松ハ大木 相見へやい二葉松
も御坐い

一山櫻御坐いへ共不見ハ御坐い川辺ハ
何こやい共榊ハ似多る木御坐い青草の
類さ〳〵て変りあるもの見當りやい

蜣ハ多く外の虫類見かけやい

一蚊ハ道中影く御坐いて形大ハ御坐い夜中ハ
出やい昼の内至て多く見ゆ〳〵きく兼

い処多く御坐い故馬のもよて節の〳〵
ハ拵たるもの（セイナカ也と云図下ハ載）を顔ハあて往来仕い
「イルコーツカ」抔と山へ入いるの皆此ものをかゝり
やい蚊ハ人里ハ居不やい

「セイナカ」の図
蚊を防く冠り
ものし

一七月頃の道中仙臺の八九月頃の氣候
程よ覺やい

一イルコーツカ」滞留の内市五郎腫氣の
症相煩役所より医師を遣し療治
致呉い水藥をのませ又赤き草實の如き
ものを為給やい（桜野茨實なるべし）追て同所より相建
有之い病院へ為取移藥用為致い拙者共も
参りて見やい所外より病人二三十人も臥居やい

何事も出立まで引立兼い故此所より滞留
罷在い処追々兼りへ養生不相叶同所
にて病死仕い由

一尤平やいい道中の内「イルコーツカ」まで七百里
も御坐いやい千前より月スコメ」とや所御坐い
同処より七八間程なる地陥なる処より井戸とも
可や所池水有り車仕掛にて其水を汲揚
樋より通し釜へ流し入きく煮や

いへハ塩となりやすいこれ山塩なり物を
見へやすい此前後の諸國ミな山塩を用ひ
やすい此塩所より出る所御坐い由潮より
煮い塩と何の変りも無御坐い
一ヲコーツカより「イルコーツカ」まて二千五百里
大川沿きの道節なり

伊爾哥都加（イルコーツカ）

寛政八丙辰年正月廿四日儀兵衛善六辰蔵
三人相そろひ「イルコーツカ」へ着早速奉行の
役所へ被召出い廻日本通詞の者其所ゑ罷在
漂着ゑ来の次第相尋らき吟味相濟奉行
聞届の上町宿ヤ分らき飯料〳〵て一月ゑ
銅銭三百枚宛相渡さき右宿ゑて月〳〵受
取いて賄仕出しやすい

一三人ゝも一所ゟ同宿仕ゐ右町宿ゟ志ちらく
罷在無程通詞役「トコロコウヒ」ゝヤ者方へ轉宅
同居仕ゐ然ゟ所其後伐兵衛一人ハ別屋へ相
轉ゝヤゐ又其後「トコロコウヒ」方へ相移り善六
辰藏ハ別居致ゐ事ゟも相成度々移轉
仕ゐ跡立之ゝの泰着を待ゐ処十月ゟ至り
尤大夫銀三郎茂治郎尤平太十郎共人到着
仕ゐ付各ヤ合三四人宛別居仕ゐ其后十二月末

津大夫清藏己之助吉郎治八三郎民之助六人
着ゟ都合拾四人相揃ひヤゐ上彼方ゟ何ゝ
相談御坐ゐ趣ゟ皆〳〵通詞役の者方ゟ
一処ゟ相成住居仕ゐ右通詞役之者ゟ居宅ハ三
坪御坐ゐ二坪を拵者ゟへ貸切り一坪ゟ家内
住居ヤゐ食物拵ゐ処ハ別屋ゟ御坐ゐ相此所
ゟ凡ゟ二ヶ年程ゟ罷在何ゟも相談の上各別
宅仕度段相願ゐ処又何ゝ評義御坐ゐ「ニコライ」

伊勢屋新蔵事なく宅と此トコロニテ宅と両所とニて別を
と相成居れるを被申渡一ケ年たから右の通と致
罷在れ又其後自分借宅と罷在度願差出し
やれ所相済いて二ヶ年と店借いたし住居
雇杯様きやれ六人一所と貸受一ケ年銀二十五枚の宿賃の所ニ罷在れ

一又其後当処ニて大商某と申者我々ニも滞
留中厚く用を掛くられるを御坐れ即右の人の
店内を宿賃なく貸くれやれ依て其店内と二別
きと借宅仕れ又暫く御坐いて別と店かへ致せし
者も有之れ伐兵衛津大夫ハ都へ出立の節迄引
續右店と罷在れ

一辰十二月九平等当所泰着の節来連を泰れ
馬を直と役所へ引懸け直様奉行の前へ被召
出れ処其最と居合れ一人本国人より丈け低
く眼の色ハ黒く一躰容子替りて日本詞ハて
何きもへ通辞仕れ併將裏束ハやはり彼国の

姿ゟ御坐ハ故不審ゟ存し其元ハ如何の方
ゟ御坐ハ哉と尋ハへハ其人の答ゟ御不審御尤
ゟて御坐ハ御聞及とハいや私事ハ日本伊勢国
新蔵と申者ゟて先年漂流し船頭光太夫と
申者と一同ゟ此国へ参り其後光太夫等ハ
帰国いたし其ハ此地ゟ残り居ハ者ゟて御坐ハ
申故始て様子相分り申ハ依之又尤平申ハ私共ハ
去丑年漂流致ハ処其前年子の年勢州光太夫と
申人船ゟて松前の方ゟ送られ帰
朝被致ハと申噂江戸深川ゟ表ハ御坐ハ豆一
通ゟ表ハ表ハ近ゟて其元等被居残ハ子ハ拙ハ母存
不申ハ誠ゟ不思儀の面會ゟてハ拙ハ扨段
々の次第奉行へ申達ハ様子ゟて相済ハ其上
ゟて新蔵同道同人宅へ連て参り新蔵家
内妻へも為逢ハ右妻何ゟ挨拶有之ハへ共言語
通し不申相分り兼ハ夫より先着の儀平

等住居の処へ参りやゝ

一新藏今の名ハコヨライハイトルイチコロテケノ」と
やゝ日本文字師匠の役相勤土地の学問所
へ日〳〵出勤日本文字手習の師匠致しゝ
當時童子の第子六人有之ゝ銀四十枚の宛
行取りやゝ漂流人此地ゟ到着の後係りの用
向も被やゝ故ゟや加増して百二十枚ゟ成る
何とも都府へ登りの節附添参り用向相勤やゝ

一右の勤功ゟて又加増し銀二百四十枚ゟ被やゝ
自国王将衣束羅紗冠帽ホーボローチと云官ゟ進む此官の冠りゝの也将衣速ハ
此度使節の着せる服ゟ似て星を付ゝるゝものなり且右の官職ゟ成ゝゝ薪蝋燭
等ゝ上ゝり相渡ゝ此ゝ へ銀五十枚年〻贈る
此ゝ丙寅年十二三歳なるへし

新藏當年四十二三なるへし妻ゝ名ハマンウェヤノ、
ムシヘイオナ」男子二人女子一人出生 俄羅斯等當所滞留中病死

後妻を娶る其女の名「カチリナ、ユキムラモオナ」
歳三十ばかりと見ゆ　新蔵日本字いろはより
假名書くまい出来い様子なり「共「オロシヤ」辞義讀み
書の事も能覚い趣にて入組い掛合の支度官
辺への願書其外の書き物等も彼方の文法
なれば自在に認取い様子なり

一日本通詞役人「コロイワノイチトコロコフ」という此
人始めハ町内村方の問所の役（検地割）を勤め七十五
枚の元行なるべくして先年熱州光太夫等送り
来りしより起り時日本通詞役より出らる是ハ五
六十年ばかり以前南部田名部の辺より漂流し
此地の永住となりし某といひし者あり「イルコーツク」の墓所は
竹内徳兵衛と彫付たる石塔あり又享保十七年何々と彫りたる日本
字の石塔もあり是等の類ハ桜井光太夫と記し田名部の辺
佐井村久助と云ふものより延享亥年漂流して彼地へ至り留りしと見ゆ久助と云ふ此人数
の内なるべし竹内ハ書紀別にあり其人に従ひ十二歳より十七歳まで

日本詞習ひ〳〵夏あり其後打捨置たき共ゆゝ
覚居い事故被ヤ渡光太夫送りの船ゑ乗組去れ
子年松前まて来〳〵由なり（日本種子ゑて右師匠某ゑ子も右光太夫送りの船ゑ乗組先年松前に来まり名をヘリフイ止といひ〳〵）扨無滞送り届け諸用も弁
いこ分帰国の上右の勤功ゑ依て銀四百枚の高
ゑヤ付らる依て當時も引續き日本通詞役
ゑて召仕い者扶を有て勝手向相應ゑ致居也（其後帝死去）
（其後此給金渡り方中途ゑて滞りい事出来二ヶ年の間不辨追々ゑ三年分一度に十二百枚受取ゑり〳〵と噂ゑ聞ゑ）

詞認い書物あ〳〵てこれをみあるせ最初何ぢとゝへ
應對〳〵ぢ〳〵ヤ様不揃ゑ辨〳〵難き事共ゑ
一ツ二ツヤ以を此方ゑ対ゑ
ゑハ差支い事也始ハ日本人ヤ夏書留めヤ
いい〳〵ゑ一〳〵なゝへヤゝ書付いるゆも不仕い凡く
新蔵ゑて問ゑ合い故ゝ奉存い

外ゑ日本　詞八年拙言致いゝヤ者ゑも
出會應對いゝ〳〵へハ一向相辨〳〵不ヤい

當所家数三千軒程あり奉行在勤二三人有
て聞ける本国より三四年置交代せて下役の
者共足軽千八百人程町年寄といふへき者を
「ゴロジニチ」といひて一人あり寺ハ十三寺なり凡て
家作りハ石造り也木造りも交る卯辰巳酉の方
に當り山あり西より北へ廻りて大河あり川
幅廣く「ヤコーツカ」の方へ流る此川極寒の
時ハ氷厚さ二三尺程なる事なり三月始て

氷解かりなる時分ハ川節より水氣蒸し
升りそやの立たるごとくにて人の面を見へ分ぬ
程なる土地の廣さ凡四里程あり此所より本国
の新都「ペトルフルカ」迄七千里實ハ六千七百里あらん唐山
界まて五百里程東北の端末の地「カミシヤー
ツカ」我蝦夷諸嶋より北にあるカムシヤツカの尽地こまて六千三百里程なる
由此総洲都のかゝる「トホリツカ」及加山
とゝ所より東北方「ブラーツカ」「ヤコーツカ」「オ

ホーツカ」「カミシヤーツカ」等の諸地ゟ至るまて数
千里の間の惣名を「シビリ」猟里ゝやハ其惣
洲皆寒氣甚〳〵夏季ゝや様成る間ハ五六
七月の間のミ暖氣ゝも可ヤハ此「イルコーツカ」
ゟかりハ中〳〵南へより地方へ暫の間ハ如此夏
ゝも可ヤ気候の様覚ヤハ扨當所近在の郷
中数千里の間を「ブラーツカ」ゝやハこゝハ「ロ
シア」本領ゝ相成不ヤハ以前より土着の種族

ゟて御坐ハ此人々も眼のいろ黒く身材も低く
「ロシア」乃人物ゝハ大ゟ違ひヤハ「ロシア」人
追々此辺土へ来り取締り付けハ後ハ町〳〵
在々も「ロシア」種の人多く相成住居仕由ゟて
此所なゝハ皆「ロシア」種の人ゝより住居仕ハ
旦市中ゟハ他国の商人も滞留罷在ハ此所の
人〳〵ハ近郷より入来ハ土着の者を「ブラーツカ」
ゝ皆〳〵呼ヤハ「ブラーツカ」ハ甚野鄙ゟ御坐ハ故

いやしからざるやうに尤言語も昔よりいひ来り
い辞を遣ひ宗旨も「オロシア」一流の宗流なる無
之い尤衣服飲食も異ひやうい併近来「オロ
シア」辞も用ひ来りい程い遣ひ衣服も羅紗の類
も相用ひやうい

當所より十四人の者八ヶ年逗留罷在い洋の
四年間より吉兵衛病死十三人と成やうい
前後仕い依之類分よりより乗りやういて

尤る相認い此地のる毎〳〵知きいへた
惣國の風躰も推て相分りやうい

街衛居室第一（カイエイ）（ヒヤスミ）　町小路共人室の事

此所家居の在る所四里程ありて　一里塚有りて是を知きる
此国の里数〳〵下同之
家数三千軒程有り町割横竪る在り
町の間〳〵る寺あり別る町の名といふものを

きらゐ寺〳〵の名をいひて住居を尋るへ道幅
狹きハ七八間廣きハ車三ツ竝へ通らるゝほゝの
所もあり屋作りハ石屋も木屋もあり其内石屋
ハ中〳〵皆二階屋あり十三ヶ寺の寺〳〵ハ皆石
造りなり銘〳〵の屋鋪構の廣狹ハ分限よ
る也其地の大小其ゝ住居のうちにハ菜園(ハタケ)あり
菜蕨(カブラ)蕪菁(イノコ)煙草等をたゝくて有る事故ゝ一軒
屋〳〵きゝゝても甚廣き方ゝて家の惣數ゝ合てハ
町小路も廣きなり魚の町ハ別ゝ在て魚類を
のゝ賣る店も無ひ居る也又豕(ブタ)手のゝきハ
市中の小店ゝて賣る牛町ハ町をつきゝあゝ
(下駄)一躰土地の惣周りゝ所〳〵きゝある所あり
足輕町(カルガ)(ヒ)(ヒ)病院鍛治屋ゝハ町より半里
ゝのゝ離れあゝく家持ゝハ銘々の住居
ゝあきゝるゝの高賣の所ハ別ゝ賣ゝの半
ある所ハ大店小店も分りてゝ住居の本宅より

昼の内其所へ手代番頭出張まして高し
夜分ハ番人をけけて鎖を置あり江戸の柵
原四日市抔の趣にて大小の店さらに有り
大店ハ石造りふ店ハ木作りにて店前二間程
の間簷下の処を通路とあさまり
一石造りの家ハ先つ惣圍の間数を打ち
其廻り並内の住居の仕切をあさへき通
るる土臺をさのるるもつへき所を皆深く
はり其内に石をつえるへて突き堅め
其上に志つくひのうきイツウエーブ四下に影ものを流す手
らるして又石をるへて置又志つくふを流す
如此さるる数遍地づへ届く程に成り時
切石をさへる也此石半面をうちを揃へ
二つちるるつのよき方ハ外面と家
の内面とふ向け其両石の間へハ小石のるいを
つえて突き堅め如是に段々石二つ

ちをかさ祢築上け一丈よも至りし時其
二つ合せの石程ある幅と廣さとの厚き
瓦を段〳〵かさるなり石も瓦と其重祢
免の間〳〵ハイイツウヨースカ色といふ石灰の如
きものを置く下タ瓦の上面と上瓦の
下面と成祢をしつあるなり（イツウヨトスカ色水地和しこれハ和りけの出るものゝ別ヨ記あり）如此ヨ積あけ定まる高さとな
さ扨二階ヨある処ハ長き大丸太を渡し

あ〳〵へそのうへヨ板をさゝり又丸太を並へ
さ其間〳〵を右石灰ものゝふてぬり
かゝ免其上ヨ土を一尺さゝり置又その上
を板ヨてさる也扨内住居の間席仕切
の所ヒ惣廻りの築立のゝ〳〵して築石の
壁出来るなり尤其石かさ祢免の間ヲ
隔をるハの寸法ありて長き延へ鋏をぬ
きのゝきヨ其内を通し其左右ヲ

くさぐさよりかくゑんろん真間席の仕切ハ
のそゝ次第好ミよりまらせ前後左右人を
の勝手よつけるゆへ幾間をあらあり
板屋根へハ瓦を置ゝ置ゝ板張まてなり
王都の方ハ屋根へ瓦を置ゝ此地まてハ屋根ハ置瓦ハ製作不出来ゝゝ　惣躰土蔵の
ゝゝ作りたて内外ようちつくゝをぬり
真白あり塗屋作りとある真よきゝ程
くゝ明り取りの窓あるこれハ板硝子を使ひ

あるもの也又雲母障子をあり左上へ下ゝ
ゝも惣板敷よりて人ゝ住居処ハ二階あり
戸ハ大抵廻し戸但大家ハくゝもんゝ開きゝ
しもあり下ゝ屋ハ煮炊する竈真餘雑用
を辨する所ゝゝ又穴蔵もあり（樊出し処ハ「シハーヤ」ゝて別屋ゝ構ゝあり）下屋表間口ハ皆廻し戸也木造り、
内ハ土臺の所をよくゝ堅ゝ大九太を井桁
ゝ組ミ上げ造るもの也真仕方ハ真九太重

祢合せ目の所下ふくらの丸太れ上の方ゑ
長く溝をたて上への木の丸太を受て
喰せ合様ゑし幾重も〳〵重祢上を定ら
高さ〳〵し出来上その所ゑて内外より白
土を塗る支石屋ゑ同〳〵井桁ゑ組上け
まるかり〳〵ハ四隅ゑ出て有る柱建ゑ
作る家作ハ絶てなきなり
扨右家の内ゑハ幾所も一間〳〵ゑその

隅の所ゑ「ヘイ土」(壁土)なるものを設く其作
方ハ先つ下地ゑ志き瓦をなゝへ四面の内
一方ゑ火を焚く〳〵竈口を元〳〵様ゑ三面
よりも石ゑて築きなけ志つくるゑて塗堅
む其間ゑよりて大小あれども大抵横一間
竪一間半程ゑ上て煙出しを屋根の上へ
ぬける様ゑ高サ三四尺そのう出し口を
細長くつけたるものを也竈口より薪を

指入き焚きて其煙窓より火煙をぬき
空へ出るも扨其煙窓の中人の立ちく
せんの屈く程の所より煙を止める蓋あり
火煙を出し押ふふ程合ありて其蓋を
あゝて立のろる煙をこゝへ其灶の内の
薪燃へ付廻ひ即焚落しを竒麗に取
のけ其前の竈口をぬさく右のうへの煙
出しの口と蓋をあゝ立へと前をを閉ち

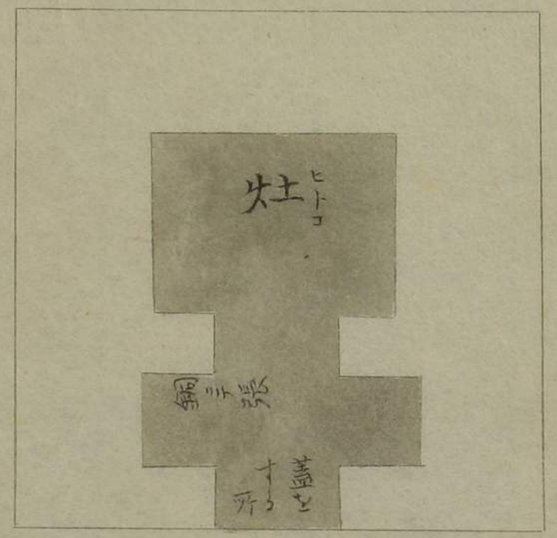
ふさゝも大火をもやしゝある後如是に煙
を止へ内に火氣を包こもるを以て温
蒸の気灶の外へとき其家内座鋪の
内に満ちて殊の外温暖なる也此物
土地寒國故家内を温め室中暖気な
らしむるために設るもの也坐敷
如此なる故に家の内甚しく暖らふく
繻半一枚になりても既に千業なる居

所とあり我〳〵心ヶ様の事ゟ逢ひたけぬ
故甚たし〳〵ハ同ゝるめきて氣遠く成心ちせり

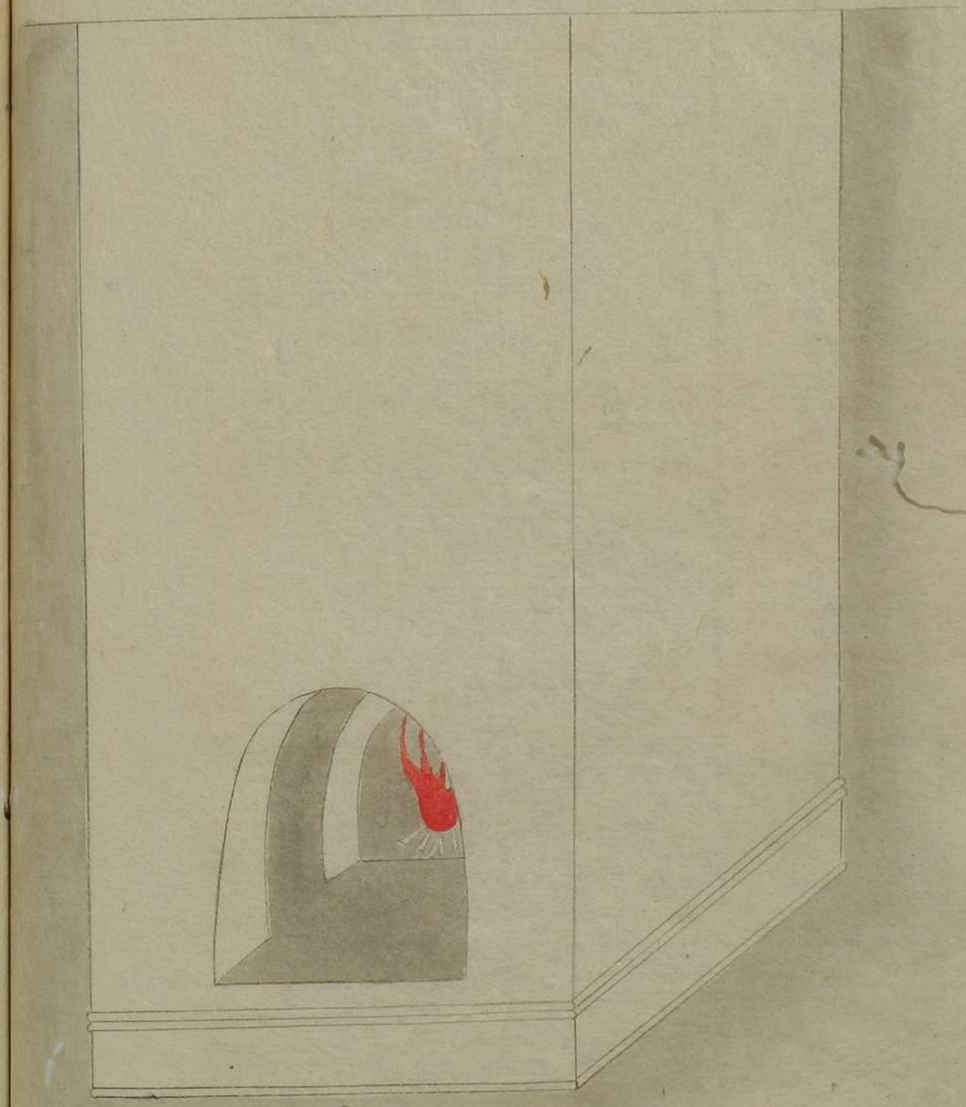
一家の内ハ男女共ゟ椅子ゟかゝりて居るあり
故ゟ坐〳〵きの内数〳〵の椅子を並へ置
尤客まへとある也食事ゟる飯臺の
大小以論〳〵あり

一上の間高き所ゟ佛の遍額(カヽ)かけ並へあり

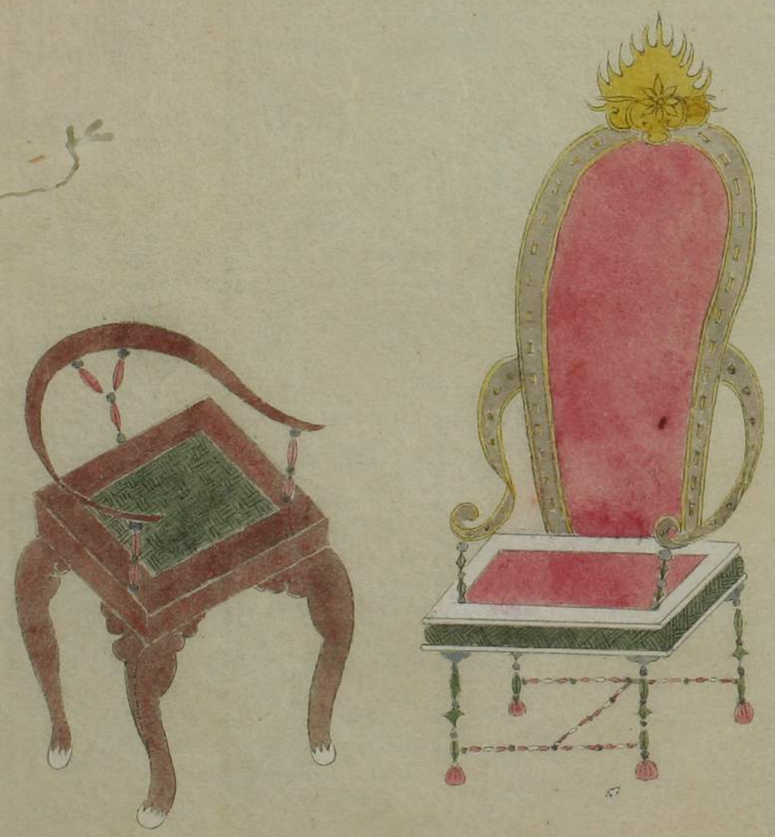
「ベイチ」の下地



「ベイチ」の全圖



椅子圖



一閨房ハ蔭ヨ有ル処ヨリ臥床(ヂドコ)ヨ褥(ヤグ)
を昼夜とり詰ヨして有前の方ヨリ
唆簾(レン)を掛け見え無ヤウふして有ル
窠道具ハ色々有ル中ニ皮の蒲團有
表裏両面乃内へハ鳥の毛を入る
至て あ〳〵この有るもの〵是鋪ふとん
なり枕のも右のごとくにして志と称のごと
なるもの〵是をいくつも重ね枕とする

上より着る物も蒲團ヨ作るもの也
品もいろ〳〵の物ヨて作りて精粗さ有
あるなり

一厠(カハヤ)も二階ヨあり庁陰ヨかこふ内の敷
板の真中ヨ　　如此穴を明け有き
上より下る受筒(セナギ)あり下の溷ヨ落つる
たつきハせて有きよりあるるなり
土地ヨく耕作乃こヤヨ住かふ

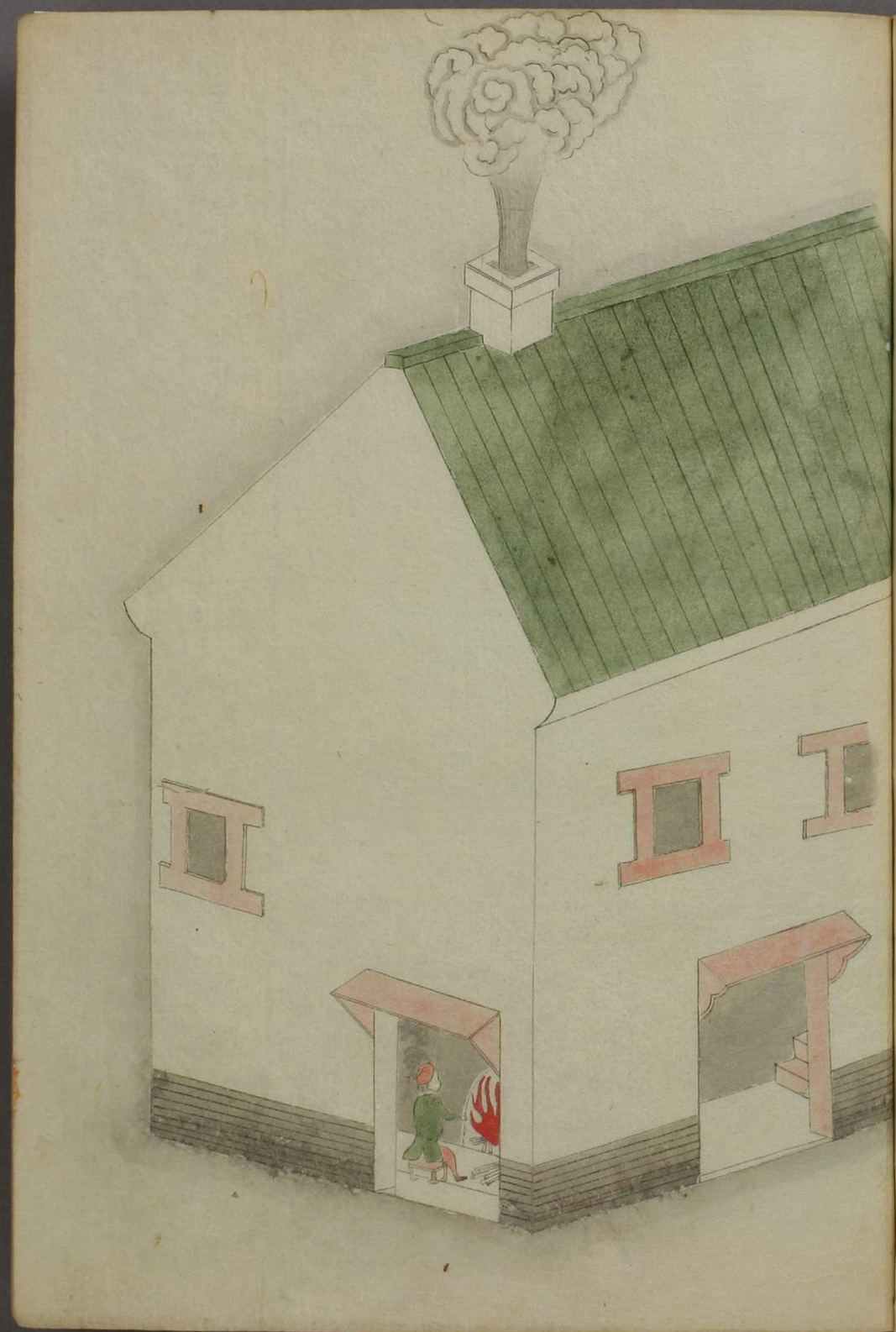
とふるあき故古きう次第ハ
さ但穢氣を避るゝて其せるあき
筋へ石灰をふりかくる也

一倉廩ハ石造りなる家の作り方と格別
変る事なし但戸前あと丈夫なると
いふまて也家の内ハ穴蔵多し是ハ多く
ハ物を貯る為ゆ設くこれ又ハ温ふ
夏ハ涼しき故物ゝくまぬといふ算家ゆ

ても必ず小き穴蔵あり夏の内肉類
又野菜の類其中ゆ貯るゆ内清冷
なる故物の損敗せる事あし夏も川
ゆハ解け残りの氷りあり故ゆ穴蔵へ入
ても腐敗ころえなし思ふ時ハ右の
氷を川よりとり来り其穴蔵のえくら
ゆ積む此冷物をもて外を圍む故ゆ
なる内いたむ事なし

一井ハ深く掘て井戸かさを其底より上迄
ならみ上げる也外ハ井桁を用ひ水を
汲むを称つくへきなり 藥ハ川水にて煎ぜ
一風呂ハかゝ風呂にて 鉛々の家に有り
但住居より離れ遠く風呂屋を建其仕
方ハ内に石を積置て其下より火を焚
其石をやく能かけたる時是に冷水をそゝき
打かけるせこれにより湯煙盛に立く

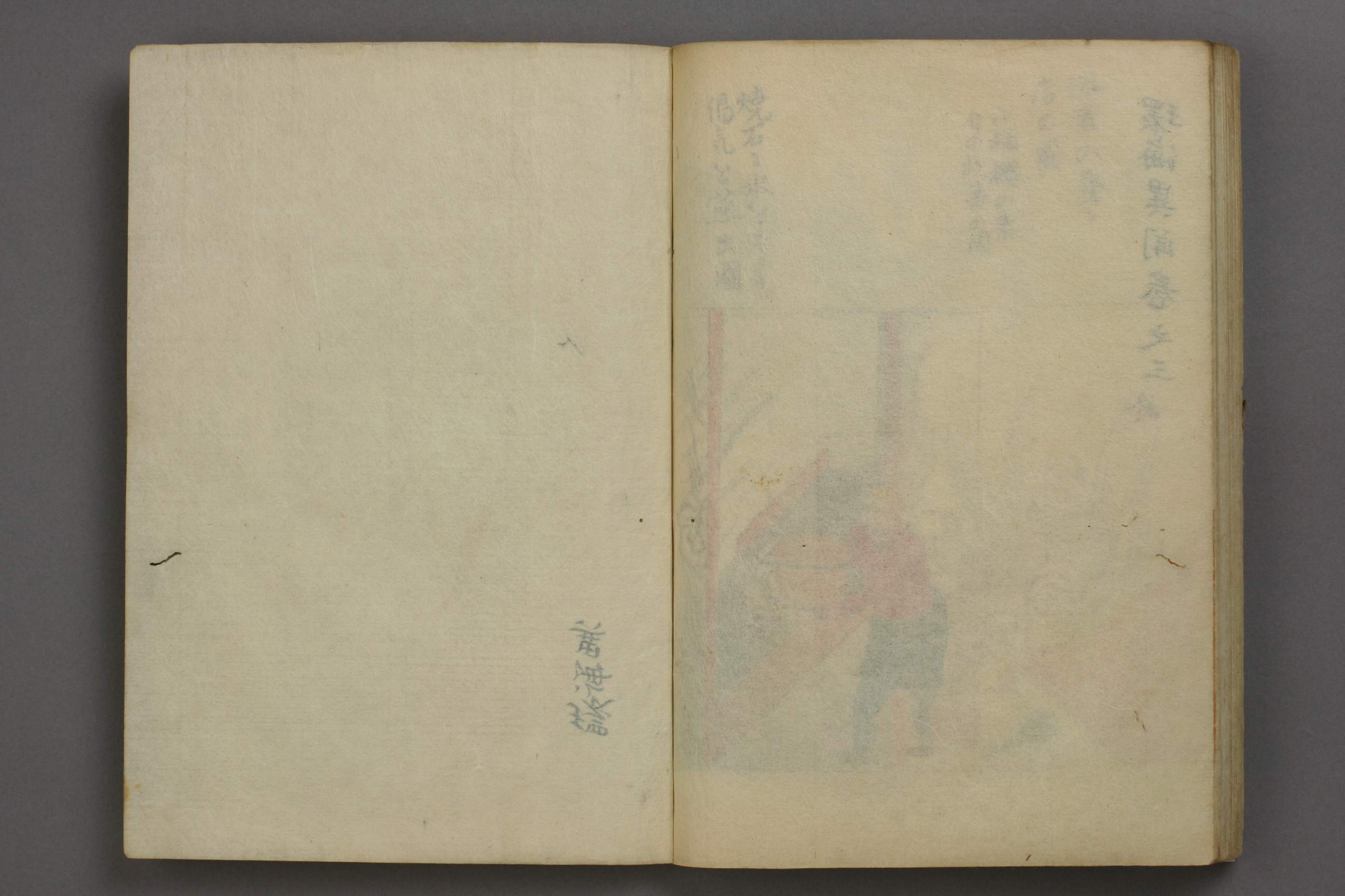
其内に充満せる此時風呂屋入口の戸を閉
扱人〳〵の入浴せる所ハ其直脇に在板仕
切にて是を隔つ其熱湯の氣こゝに蒸
し来る也扱内に幾重にも 棚を設く
其棚の上に人々裸にまとひて入り其湯氣に
體をむせる也 能〳〵垢もよれ草卧も直ち
櫻の小枝葉付のまゝなるを束ね箒の如くして
其内にたゝく人々是を以て自身に體を摺る



垢よく落るゝ小桶より冷水を入置故火氣餘
るゝ堪かゝれハ折〳〵顔より水をそゝぐ
陸湯水流し此方より同し折〳〵出ておら
湯を遣ひ又入るゝ月より四度斗り出つゝ是ハ
月シキリセンヒ」と云式日のまへの夜より密てたて家
内中身を清める也市中錢湯もあり惣て踊
るゝ但し大勢金込故至て賑ゝ構へなる近ゝ
入浴ゝつゝさるゝもの多し〳〵内より居かゝ

浴者の登り
店の圖

小桶櫻の葉
付の枝箒の図

燒石ゝ水をそゝき
湯気を蒸出圖

環海異聞巻之三 終